

発行元
東京新聞
南千住東口専売所
TEL5850-3699
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL090-2657-0300

すまいるたん



汐入

第105号
平成21年
5月3日



昭和37年5月4日東京新聞掲 載 三河島駅列車衝突事故

昭和37年(1962) 5月3日21時36分頃

国鉄(現JR)常磐線三河島駅—南千住駅

間で貨物線を走っていた下り蒸気機関車が脱線し、そこに上野駅発取手行きの下り電車が機関車に衝突して上り線路内に脱線しました。更に、南千住駅を発車した上野行き上り電車が、脱線した下り電車に衝突するという、列車多重衝突事故となり、消防車両約80台、消防職員・消防団員約1,100名が出動し、死傷者約530名という事故になりました。

この事故を機に、自動列車停止装置(ATIS)が、計画を前倒しにする形で

国鉄全線に設置されることになり、1966年(昭和41年)までに一応の整備を完了しました。

事故発生から1年後に駅北東の浄正寺に慰霊聖観音像が建立され、現在も献花が続けられ当時の惨事をしのばせています。下記は当時の47年前の東京新聞掲載記事です。

死者163重軽傷385人に

三河島衝突事件

責任者を徹底追及

三日夜、大惨事をひき起こした東京荒川、三河島衝突事件は四日朝になって、さき死傷者がふえ、荒川駅の特別捜査本部の調べでは同年終時までに、死者百六十三人、男百五十五人、女三十四人、不明四人、重傷者百九十八人、軽傷者百九十五人となった。

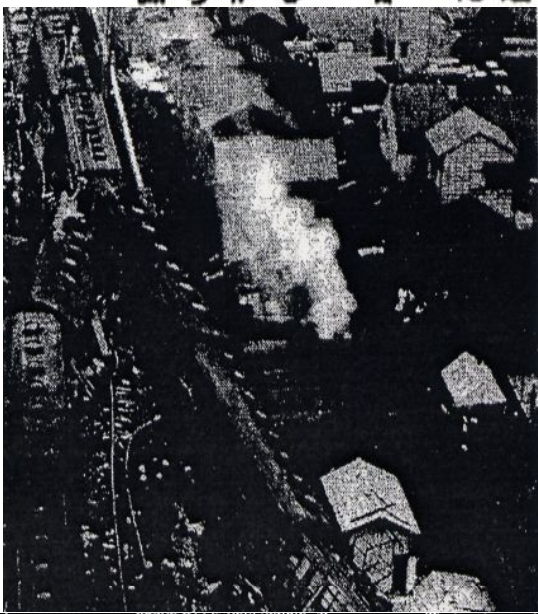
緊急コックを使ってドアをあけ、上り線路上に約五十人が降りて歩き出した。そのとき上り電車が時速約八十キロで進行してきて、線路を歩いていた人の群れにアッとという間に突っ込んだ。上り電車は下り電車の最前部に衝突、下り最前部車両を約四十キロ引きずってやっとならなくなった。上り電車前部四両は脱線、最前部一両は車体の上半分がふっ飛び、高架線から約五メートル下の荒川区荒川三ノ

送会社へ

覆いかぶさるようにして落ちた。この事故で架線をつつてある鉄塔もへし折られた。

このように多数の死傷者を出した原因について上り電車の前から三両が約七メートルの高架線から転落したこと、それにさまの凶

電田町駅事故と同じように脱線した下り電車の乗客が上り線の線路上を歩いて上り電車にはねられるという二つの悪条件が重なったため。下り電車が脱線してから上り電車が現場に到着するまで約四分間あったので、下り電車の乗務員が殉牲団をたくさんとして、危険を上り電車に知らせる余裕があったはずで、これを知らせれば、これほどの大事故にはならなかったらうと国鉄はいっている。



左端が脱線した貨物列車、中央が下り電車、右が脱線して民家に突っ込んだ上り電車(三河島で)

白日にさらされた惨状